

# ウラン鉍山と二つの生活世界

内山田 康



# ウラン鉱山と二つの生活世界

内山田 康

## 1. 人々が信じない約束

(扉が開き、大臣、従者をしたがえて登場)「30年の約束、これは守るために全力を尽くします」。福島県の大熊町に造られた中間貯蔵施設を訪れた小泉進次郎環境相は、テレビカメラと記者たちに向かって(不在の町民たちに向かってではなく)そう言った(朝日新聞 2019年10月3日)。福島県の大熊町と大熊町では、2017年10月28日に中間貯蔵施設が稼働を始めて、除染で生じた10万Bq/kg以上の放射性廃棄物がダンプカーで運び込まれた。その日が初めてではない。運用はそれ以前に開始されていた。(稼働前に運用を開始するのは六ヶ所村の再処理工場も同様だ。)除染で出た汚染土の搬入は2015年から「試験搬入」の名目において始まった。2045年3月にはすべての汚染土は県外で最終処分されると法律で定められている(朝日新聞 2017年10月29日)。だが、法律で決まっていることと、それを実施することは別のことだ。

中間貯蔵施設の放射性廃棄物を30年後に県外で最終処分するという約束を政府は守るだろうか。約束は守るものであるという社会通念をコミュニケーションの地平で有効利用して、帰還困難区域の一部に放射性廃棄物を30年間貯蔵することを受け入れさせた。これは核のごみを受け入れさせるための計略だったのではないか。一度始まった大掛かりなプロジェクトは止められなくなることを我々は知っている。これもまた時間が経過した後に、前提条件が変わり、最初の約束を守る必要性がなくなるのだろう。利益の衝突が起こるであろう核心部分を曖昧にしたまま、周縁に核廃棄物を捨てる方法を正常化するために必要なインフラストラクチャーを建造しつつ、時間の経過とルーティン化を味方につけて、人々の感覚を麻痺さようとしている。ゴールが変わることが想像できる放射性廃棄物を集積して貯蔵する事業と、放射能汚染の危険の除去を前提とする避難指示の解除は、どうやって両立できるのか。プルトニウム生産炉の火災事故、再処理工場から捨ててはいけない核廃棄物の秘密の投棄、不明の核廃棄物が捨てられたプール、等々によって深く汚染した英国のセラフィールドのように、周囲の人々を経済的かつ社会的に原子力施設に依存させ、放射能汚染の事実慣れさせ、最終処分場までも受け入れさようとしているのだろうか。

私が話を聞いた浜通りの人たちは誰一人として政府による県外で最終処分の約束を信じていなかった。県外で放射性廃棄物を受け入れる場所などないだろうから、ここが最終処分場になるだろう、と誰もがあきらめたように言った。それでも歴代の環境大臣は中間貯蔵施設を視察にやって来て、地元の人々が信じない約束を繰り返している。約束を繰り返す彼らもまた、その実現に必要な具体的な作業を想像できないだろう。約束を口にする彼らは、2045年3月には誰も環境大臣でいるはずはないのだから。

双葉町は町有地の一部を環境省に提供して中間貯蔵施設の工事を推進しながら、国に土地を売るのではなく、地上権を設定して国に土地を貸す方法を選んだ。30年後に貸した土地を返してもらい姿勢を明確にしておいて、県外での最終処分という国の約束が守られるように圧力をかけるためだという（朝日新聞 2018年7月21日）。この作戦も両義的に見える。それは自分たちを守るための戦略なのではないか。貸借権ではなく地上権を設定しているから、国が30年を超えて土地を使い続けることを見越しているのではないか。

地元の人々が信じない約束を大臣が繰り返すことにどのような積極的な作用があるのか。なぜネタ割れしている説得術、すなわち今は直接的な衝突を避けておいて後で責任を回避する政治のテクニックが通用するのか。これは人間科学と社会科学にとって重要な問題だ。一旦進み始めたら組織も物質も生物も社会関係も性質を変える。共時的に定義された問題が、通時的に変化することは普遍的に知られている。汚染と雇用によって環境を変え続ける隣接した二つの中間処理施設の周囲に伸びる諸々の社会関係は、事業が進むに連れて変容してゆき、30年後には当初の想定とは違うものに変形しているだろう。高レベルの放射性廃棄物は、それが保管された場所、それが捨てられた場所を長期間に渡って汚染し、その過程とインタラクションしながら社会的な諸関係と自然的態度も変容するからだ。

だから県外最終処分を法的に定めたと言明しても、そして歴代の環境大臣が訪れて県外最終処分を記者たちの前で（そう、記者たちに向かって）約束したとしても、約束が守られる保証はどこにもない。不確実な巨大プロジェクトを開始することと、その結果について前以て約束することの連鎖はそれぞれ異なり、多様なエージェントたちが関わる度合いが高くなるほど両者の乖離は大きくなる。絶対に安全だと言葉の次元で繰り返し表象を続けた原子力発電所が、現実には炉心溶融した事故の後では、少なくとも福島県の浜通りでは、大臣らのこの約束は信じられない。

このようなことはこれまで何度も観察されてきた。例えば、開門がすでに確定したにも関わらず開門を認めないことが確定した諫早湾訴訟において、国家は自ら招いた自己矛盾を解消するために漁師たちを切り捨てた。約束した時には存在しなかった条件が後から現れて、それを根拠に国の約束は守られない（朝日新聞 2019年6月28日）。不確かな環境世界の中で、知覚と経験と道具を使って魚の動きを判断しながら漁をする面白さを知る漁師たちの仕事は、行政に管理された干拓地の制度の中で行われる農業に比べると、国家の諸機構による支配からより自由な判断

の余地を持っている。干拓地で営農する人々は、諫早湾で半農半漁の生活をしてきた人々ではなく、国家の干拓地プロジェクトによって造られた土地に移住してきた人たちだ。漁民と農民の対立は、諫早湾干拓事業が作った対立だった。

2019年3月に宮古島に陸上自衛隊の基地が開設された時、防衛省は弾薬庫を作らないと約束しながら倉庫に弾薬を運び込んだために住民が反発した。防衛省はこの非を詫びて弾薬を一時的に島外に運び出し、正式に弾薬庫を造った後で弾薬を運び入れ、さらにミサイル部隊の地对空・地对艦誘導弾も保管する準備を進めている（朝日新聞2019年10月8日）。これは軍事基地の建設に反対する人々の反対運動をしばし弱めるための時間稼ぎの技術であり、事業が始まり、前提条件が変わり、もはやこれを止めることができない段階に進んだ時に、言葉で詫びを入れながら事業を「粛々と」進めるやり方だ。寓話はいくらでもあり、我々はこの仕組みをよく知っている。

もう20年以上も前のこと、私はバルセロナで行われたEASA（ヨーロッパ社会人類学協会）の研究大会で研究発表をした際に、会場で出会った三人の日本人の人類学者を含む四人の日本人とカフェに行った。彼らは日本ではよく知られた人類学者たちで、一人はバルセロナ在住、二人は東大と国立民族学博物館からEASAの研究発表を聞きに来ていた。三人組のジプシーが一人の人類学者と一緒に来た女のバッグを狙っているのが見えた。私は皆にジプシーたちに狙われていることを知らせた。お金を払い（それは見られていただろう）カフェを出たところで、一番後から歩いて来た人類学者の左のポケットに一人の男が手を入れて何かを取ろうとして、気づいた人類学者が声をあげて両手でそのポケットを抑えた時、反対側から来たもう一人の男が右のポケットから財布を取って人混みの中に駆け出した。続いて人類学者の抵抗を引き出したジプシーも駆け出した。私が二人の行方を見ようとした時、一人の女が我々の前に立って大きな笑みを浮かべ、ゆっくりと後ずさりしながら両手を大きく振って「なんでもない、なんでもない」と言う間に、別々の方向に走った二人の姿はすぐに見えなくなった。女も踵を返して人混みの中に消えて行った。私はその出来事の展開の鮮やかさと三人組の仕事の見事さに舌を巻いた。

この作戦のステップは三つある。(1) あるフェイクの事件を起こして当事者たちの注意を惹きつけて狙った場所にスペースを作る。(2) そこに開いた時間とスペースで中心的な仕事を瞬時に実行する。(3) テンポを変えてゆっくりとした語りと魅惑的なパフォーマンスで事実究明の初動を攪乱して逃走の時間を稼ぐ。

## 2. 時間稼ぎと時間性

原子力に関わる約束は、国家の安全保障や安全と危険を持ち出すことによって、アメリカにおいてそうであったように（Kuletz 1998）、またフランスにおいてもそうであったように（Hecht

2014)、核の平和利用と核の軍事利用は結びつき、原子力にコミットした国家と産業と学会の三者は入れ子状のセットになっていて、その約束は守られない。それがどうした？私はこの国を救ったのだ。多くの前例が示すように、開示を求められた事実を伏せたままにして、進行中の事業を例外的な扱いにすることは決して困難ではないだろう。

宮古島の弾薬庫問題において防衛省は住民が約束違反だとして抗議したことを狭くかつ厳密に定義し直して、その非を（ただ文学的に）認めて弾薬を倉庫から島外に運び出し、その間に新たな弾薬庫を造り、そこに弾薬のみならずミサイルまで搬入する。防衛省の約束は島民たちが用法を知らない特殊な術語の約束だから、すなわち弾薬を運び込んだ事実を隠したことが問題だったのだから、防衛省はその弾薬を島外に運び出し、今度は隠さずに弾薬庫を設置して、そこに弾薬とミサイルを搬入するという解決方法を採用した。陸上自衛隊の駐屯地が整備されて部隊が配備されるということは最初からそのようなことが想定されていたと考えねばならない。弾薬を持たない軍隊が離島防衛することはあり得ない。ネタは最初から割れていたのだ。むしろ、主権権力はどのようにしてこのような約束を繰り返すのか、人々はどのようにしてネタが割れた嘘に騙され続けるのか、これが重要な問題だ。

30年後には搬入した全ての汚染土を県外に搬出して最終処分するという約束に裏書きされた中間貯蔵施設を造って放射性廃棄物を暫定的に貯蔵する事業は、時間の中でその場所をどのような場所へと変化させるのだろうか。溜まってゆく放射性廃棄物はそこをどのような場所に変化させるのか。放射性廃棄物を大量に保管した場所はその後どんな用途に使えるのか。

歴史的に見ると、アメリカのハンフォード、英国のセラフィールド、フランスのラ・アーグがそうだったように、放射能で汚染された場所は、放射能をさらに引きつける（Blowers 2017）。原子炉が廃炉になった後、その場所は新しい原子炉の候補地になりやすい。再処理工場が廃止された後、放射能で汚染されたその場所は何に使えるのだろうか。アメリカ南西部のインディアンの保留地に隣接する砂漠では、過去に核兵器の開発と核実験が行われ、核廃棄物はこの同じ場所に捨てられ、さらに運び込まれて来る（Kuletz 1998）。

セラフィールドの場合、そこはすでに放射能で高度に汚染されている上、反対運動が他の候補地ほど強くないという理由で最終処分場の現実的な候補地になっている。そこで保管されているプルトニウム 239 の半減期は 24,110 年、ウラン 235 の半減期は 7 億 400 万年だ。これを 100 年間保管する建物が建設されているが、人間の制度が管理できるのはそこまでだろう。これを遥かに超える期間に渡って放射性廃棄物を安全に管理することは、人間にできることではない。だから核のごみを投棄した後に何もしないですむような投棄の方法について細々と実験を続けながら、解決を先延ばしにしている。その間に中間貯蔵施設が最終処分場になる可能性は無くならないまま、30 年はカウントダウンしている。

ミサイルを持ち込まない離島防衛の部隊、放射能汚染のない原発、環境を深く汚さない再処

理工工場は、嘘とプロパガンダの地平でしか存在しない。短期的な経済効果と引き換えに受け入れを決めた後になってこんなはずではなかったと言っても現実是不変である。一旦始めたらそのゲームは取り込んだ物質の性質上ずっと続けなければならない。核抑止のための核武装も始めたら止められないゲームだ。核兵器を開発して部隊に装備しても、それは使われることがないと言われている。核抑止力の想定された効果は、保有する核兵器の圧倒的な破壊力のために相手が攻撃できないという想定であり、だから核兵器は使われないという考え方だ。この抑止力ゲームにおいて優位な地位に立つためには、敵よりも常に強力な核兵器を開発し続けて常に直ちに使える状態にしておく必要がある。それは効率よく敵を壊滅的に破壊するという前提だ。だが相手も同様の核兵器を開発している。だから決して使われることのない核兵器の開発を続けるという根本的な自己矛盾を抱えることになる。人々はこの矛盾に気づいていても、この奇妙な理屈を使い続ける。そして核開発は国家安全保障の根幹に関わるから、事実には明らかにされない。

30年後に県外で最終処分するという約束に戻ろう。このような約束は、目の前の直接的な反対を抑え込むために繰り返される。様々な原子力施設の稼働に不可欠な放射性廃棄物の貯蔵施設の物質的で土木的な建設は進められる。中間貯蔵施設には放射性廃棄物が運び込まれ、弾薬庫には弾薬が運び込まれる。使わないために、すなわち核抑止力として核兵器が開発される。だが合成的な連合のプロセスは進行し続け、さらに多くの諸エージェントが結びついた配置が姿を現わし、それは長い連鎖を持つマシンとして働き始める。時間が経つにつれて、それは実在としての持続を獲得して、その現前性を強めてゆくだろう。その時、30年後に運用をやめるという昔の約束は非現実的なものに見えているに違いない。この通時的な関係の変容を見越して嘘の約束をしているのだ。

すでに物質的な現前性は強まっていて、他のエージェントたちと結びついた放射性廃棄物と貯蔵施設、諸々の弾薬と弾薬庫を反対運動によって取り除くことは確実に難しくなっているだろう。実在のフェーズが確実に始まり、エージェント同士の前言語的、すなわち言わずもがなの結びつきは次第に深まってゆく。これを知っているからこそ、政治家の約束は今における言葉のパフォーマティビティが重要なのであって、それは歴史的な過程が明らかにする真実とは別の次元の出来事だ。言い換えると、言葉の約束は時間の経過の中では弱いリアリティしか持たず、物質のプロセスが徐々に作り上げる仕掛けが時間の経過と共にリアリティを持つようになり、この装置のリアリティが慣習を利用した最初の約束を無効にするのを待っている。だから我々は時間の経過の中の状況の変化を常に想定しなければならない。それは難しいことではない。今では古くなった原子力発電所、再処理工場、核廃棄物貯蔵所において、時間の経過と共に何が起きたのかを調べればこれを想定することは難しくない。

英国のセラフィールドで1956年に運転を開始した世界最初の原子力発電用のマグノックス炉に耐震性能を付加して東海村に建設された東海原発は、1965年に運転を開始して1998年に運転

を停止した（朝日新聞 1998 年 4 月 1 日）。当初の計画によれば廃炉作業は 2017 年に完了するとされていたが（朝日新聞 2001 年 10 月 5 日）、10 年後の 2010 年になると、原子炉解体に使う装置の仕様が決まらないために解体終了は 3 年遅れて 2020 年になると見直され（朝日新聞 2010 年 7 月 31 日）、3 年後の 2013 年には、放射性廃棄物を埋める処分場が決まっていなかった理由で解体終了は 2025 年に延長され（朝日新聞 2013 年 11 月 18 日）、6 年後の 2019 年には、放射性廃棄物を運び出す装置と廃棄物を入れる容器の設計に時間がかかっているという理由で、解体終了は 2030 年に延長された（朝日新聞 2019 年 3 月 15 日）。3 度目の延期の際に語られなかった問題がある。それは解体作業から生じる放射性廃棄物の最終処分場だ。

この「バイオニア的」な廃炉事業が開始した時には問題として取り上げられなかったが、廃炉作業を開始した後になって敷地内に保管されていた放射性廃棄物の内、低レベルの放射性廃棄物を敷地の地下に埋めることになった。減速材として使われた黒鉛などの高レベルの放射性廃棄物と、格納容器などの中レベルの放射性廃棄物を埋める場所は決まっていなかった（朝日新聞 2014 年 9 月 26 日、朝日新聞 2015 年 7 月 30 日）。低レベルであるとはいえ、放射性廃棄物が埋められた土地は農地や宅地には適さない。こうして一度放射能汚染された土地は、廃炉が終わった後も、その使用方法はリスクを避けるために制約されねばならないが、汚染が基準以下だと判断されれば、「なんでもあり」となるだろう<sup>1)</sup>。2030 年が近づくと同様のことが繰り返すだろう。廃炉事業はノウハウがないまま始まる。これは通常のやり方であり、廃炉の費用は増大し続ける。一旦始めたら事業は止められない事を彼らは知っていて、費用の増大は事業を止める理由とはならない。

英国のセラフィールドとフランスのラ・アーグで何が起きたのかを振り返ると、このような過程は原子力業界の常態であったと判断できる。彼らは時間をかけながら始める時には持ち合わせていなかった廃炉の技術を習得しようとしている。彼らは試行錯誤の学習過程を「バイオニア」と肯定的に呼び、廃炉の具体的な過程、特に錯誤については事実を黙して語らず沈黙を貫き、必要となれば虚実をコミュニケーションする。これは彼らの仕事の政治と社会と文化に関わる核心部分を構成しているのであり、例外ではない。人類学的に考察すると、これこそがその仕事の作法なのだ。

このような仕事の慣習を参照すれば、30 年後に県外で最終処分するという約束は、例えそれに法的な根拠を与えていたとしても、地元の人たちが信じないことには社会関係的かつ歴史的な諸々の根拠があり、政治家たちによる丁寧な説明は、ネタの割れた時間稼ぎでしかない。（だがネ

---

<sup>1)</sup> コジエマ（後のアレヴァ／現オラノ）は核物質防護や安全のための法律が整備されていなかったガボンにおいて、フランスとは異なる基準でウラン採掘を行い、採掘後は粗雑で安上がりな方法で埋め立てを行い、ダムを造り人工湖に沈める方法を採用しているが、人々はその水を日常的に使っている。



タが割れた嘘の約束が時間稼ぎに使えるとは一体どういうことなのか。) 持続とリズムにおいて質の異なる諸々の時間性、すなわち政治の時間性、企業の時間性、物質の時間性、我々自身の時間性、環境世界の時間性を観察してその中に30年後に県外で最終処分という公的な約束を位置付けて分析しなければならない。そして人々の諦めが何を生んでいるのかについても追跡しなければならない。

### 3. ウラン鉱山を埋めた場所の未来

2019年7月9日から22日にかけて、私はガボン東部のコンゴとの国境近くにあるウラン鉱山跡の日常生活について調査をする準備の一環として、ニューメキシコ北西部の高原のナヴァホ・インディアン保留地に残されたいくつかのウラン鉱山跡を訪れた。ニューメキシコの北部中央には核兵器を製造するために造られたロス・アラモスの施設群があり、近くのプエブロ・インディアンの土地は、谷間に捨てられた核廃棄物によって汚染されていた。さらには核廃棄物を保管していた場所が火災を起こして広い地域で放射能汚染が起きたことをインディアンたちは問題にしていた。南東部の砂漠の中には地層処分施設があり、暫定的に核廃棄物を保管するためにいくつかの企業が土地を買収していた。私企業の収益性とその短期的な時間性は核廃棄物のエネルギーの持続をコントロールしない。ニューメキシコではウラン鉱山と核兵器開発と核廃棄物の投棄と埋設によって先住民たちが住む地域で放射能汚染が起きていた。先住民の生活世界がまるで「現代社会」の外にあるかのようだ。

7月13日の地元の日刊紙インディペンデントに掲載された記事を読んで、私はおやっと思った。エナジー・フュエルズというウラン鉱山の会社が、エストニアからウランを含む尾鉱(選鉱くず)を買ってウランを精錬した後で残った尾鉱をユタに所有する土地の地下に埋設するというのだ。これを書いている最中にアメリカ・インディアンの保留地の放射能汚染について調査している友人が、人形峠のウランを含む尾鉱が資源としてユタ州のユトマウンテンユト保留地の近くのホワイトメサ・ウラン精錬所に運ばれ、ウランを精錬した後、廃棄物はそこに埋められていたことを教えてくれた。この精錬所はエナジー・フュエルズが所有している。

私は7月13日にチャーチロックのウラン精錬所の尾鉱を溜めていたダムが40年前の1979年7月16日に決壊して広い地域を汚染した事件を忘れないために行われたナヴァホの式典に出席した。パイプを皆で吸う儀式の後、参加者たちはダムが決壊した場所まで道路を歩き、それがどんな事故だったのかについていくつかの証言を聞いた。その道路の反対側、すなわちウラン精錬所のダムの決壊事故が起きた谷間の反対側にエナジー・フュエルズが土地を購入して、そこで新たなウラン採掘を始めようとしていた。

その鉱山会社は、ウランの鉱脈のある地下にウランを溶かす酸あるいはアルカリを溶かした

水を注入して溶けたウランをくみ出す採掘方法を採用して、40年前の事故がナヴァホの土地を汚染した同じ場所でウランを採掘しようとしていた。7月15日にはナヴァホの活動家のレオナがこの採掘予定地に案内してくれた。エナジー・フュエルズは「その場で分離」(in situ reach)する方法で効率よくウランを精錬する準備をしている。その方法は地下水を汚染することが知られている。だからナヴァホ・インディアンはこれに反対していた。効率よくウランを抽出することは、エナジー・フュエルズにとってもオラノ(旧コジェマ/アレヴァ)にとっても経済の観点から決定的に重要だが、それは同時にウラン鉱山の周囲に住む人々が他の生物らと共生する土地、水、空気、動物、植物、菌類の放射能汚染について経済的な態度を取ることもある。

原子力業界は核エネルギーがクリーンでグリーンなエネルギーだというPR活動に力を入れているが、それはメトロポリスで作られて中心を循環する心象であり、放棄されたウラン鉱山跡や核廃棄物が捨てられた周縁の周縁から見た時、放射能汚染の深さとその持続の長さは、クリーンとグリーン慣用法の不気味さを際立たせる。ニューメキシコの核のベルトで私たちが目にするのは「放射能」、「危険」、「通り抜け禁止」、などの文字と鉄条網だ。ガボンの熱帯雨林の中のウラン鉱山跡まで行くと、放射能で汚染された場所がどこなのかを示す印は極めて少なくなる。中には文字が消えている看板もある。危険地域は出入りが自由だ。ガボンのムナナでウランの採掘が始まった1958年頃から、数百万トンの尾鉱が川に捨てられていた。すり鉢状のウラン鉱山のすぐそばに建設された鉱山労働者の近代的な住宅群は、この尾鉱で造られた。ニューメキシコではウラン鉱山の尾鉱は丘のような姿をしてインディアンたちが住む地域に連なっている。

#### 4. 美的なプロパガンダ

ジャック・シラクが亡くなった二日後の2019年9月28日のル・モンドは、土曜日の特別版の一面に元パリ市長で元大統領の大きなカラー写真を掲げた。落ち着いた面持ちでカメラを見つめる元共産党員でドゴール主義者となったこの偉大な政治家のポートレイトの左側には、控えめな白抜きの文字が「ジャック・シラクの死、一つの結末、一つの時代」と綴る。1面を捲ると2面と3面の見開き、左側の4面、6面、8面、それに10面と11面の見開きは、この政治家の人生に捧げられている。慎み深く構成された特別版の右側に位置する5面、7面、9面には、全面広告が挿入されている。5面は4つの銀ボタンをきっちりと掛けた古風な軍服を思わせる上着姿の若い女性が緑色の皮靴を肩からかけた肖像写真にPRADAの白抜きの大きな文字が中央下に配置されている。7面は白地の紙面の中央に藍色の大きな文字が三列並ぶ。「空気を替えよう、そこで、直ちに」。その右下にはフランス電力(EDF)が今後4年間でヨーロッパの電気自動車を4倍にしたいこと、EDFの電気がほとんどCO<sub>2</sub>を排出しないことが藍色の文字で書かれ、その下の中央よりにはEDFの朱色のロゴが鮮やかに配置されている。脚注に相当する位置には藍色の

小さな文字で、EDF が発電する電力の 78%は原子力発電、12%は再生エネルギーによるもので、90%は CO<sub>2</sub> を排出しないと説明する。9 面は青い海に浮かぶ紅海の無人島を上から見たイメージに白い文字が「世界のどの片隅へ？」と問いかけ、見る人を汚れのついた現実のサウジアラビアの政治から夢のサウジアラビアへと誘う。

三つの全面広告は、現実離れした三つのイメージを媒介して読者をおある方向へと導こうとしている。PRADA の広告は、シラクが従軍したアルジェリア戦争やドゴールの戦争を想起させながら、これを見る人を物神の方へと誘惑している。サウジアラビアの広告は、体制に批判的だったジャマル・カショギ氏をイスタンブールのサウジアラビア領事館で殺害した事件の非道で冷酷なイメージに塗れたサウジアラビアを、夢の島の漠としたイメージと置き換えようとしている。

EDF はこの広告において原子力発電と再生エネルギーは CO<sub>2</sub> を排出しない同じ種類の発電だとする単純化の操作の後で両者を足し算する。原子力業界は 1973 年の石油危機に際して、危機を乗り越える切り札としての原子力発電の重要性をセールスすることに成功したし、地球温暖化の改善を目指した 2015 年のパリ協定以降は、原子力発電こそがこの危機を乗り越える切り札だと宣伝している。これは純粋な宣伝だ。核燃料サイクルの上流のウラン鉱山でも、中流の核兵器の製造過程と原子力発電所と再処理工場でも、下流の核廃棄物の保管施設と埋設施設でも、放射性物質の投棄と放出と放射能漏れによって放射能汚染が起きていることを、その美しく優しい科学技術のイメージは隠している。

フランスが元大統領の死を悼み、藻に服しているこの時、シラクの偉業を振り返る紙面の間に EDF のクリーンなエネルギーの野心的な夢が控えめに挿入されていた。国葬の列にまぎれこんだこのイメージは巧妙で教区的なプロパガンダだ。パリには原子力発電所も、再処理工場も、核廃棄物の貯蔵施設もないから、原子力がクリーンなエネルギーであるという虚偽の表象は、日々の個別で具体的なインタラクションの中で衝突し摩擦を起こすことはないだろう。放射能漏れや放射能汚染が起きている場所から見ると、この広告は一気にブラックジョークとなる。メトロポリスで作られたイメージを持って周縁へ旅しても、そこからさらに周縁の周縁へと旅しても、同じバブルの中で同じ世界の人たちと対話を続けている限り、EDF とそれが深く関与する国営企業のオラノ（旧コジェマ／アレヴァ）が、そのグローバルなオペレーションにおいて周縁および周縁の周縁で何を起こしてきたのか知ることはできない。だから私はいくつかの異なるバブルの中に出たり入ったりしながら、この奇妙なグローバルな装置の働きについて大まかなスケッチを描いておこう。

## 5. ガボンのウラン鉱山

フランスの原子力庁（CEA）は、ガボン東部のオゴウェ川の上流域（オート・オゴウェ）の

ムナナで、1956年にウラン鉱脈を発見した。当時ガボンにはフランス領赤道アフリカの一部であり、ムナナにおけるウランの採掘の準備は、CEAが直接行った。1960年にガボンは独立したが、CEAはガボンのウランがフランスの核エネルギー政策のために独占的に使える仕組みを独立以前から準備していた。その仕組みは「フランサフリク」すなわちフランスのアフリカと呼ばれ、表の外交とは別にシャルル・ド・ゴール大統領のアフリカ顧問だったジャック・フォカールが深く関わる秘密の多い軍事的かつ政治的かつ経済的な介入によって維持されていた。

CEAはムナナのウラン鉱山のオペレーションのために1958年に鉱山会社COMUFを創設し、初代のディレクターはフランスにおけるCEAのウラン鉱山開発の責任者が着任した。COMUFは1958年から1999年までムナナとその周辺でウランを採掘したが、経済的に見合うウラン鉱脈を掘り尽くしてしまったという理由で1999年にウランの採掘を終えた。これについてはガブリエル・ヘックによる詳細な研究があるからここではこれ以上深入りしない(Hecht 2012)。しかし、このことだけは言うておこう。遠く離れた国の核戦略と原子力エネルギー戦略の野望の実現に奉仕するために、環境を長期にわたって深く汚染するウラン採掘をさせてはならない。短期の金銭的、政治的な見返りだけで、その場所が何億年も汚染し続けるウラン採掘をさせてはならない。CEAやオラノ／アレヴァ／コジエマは経済的に見合わない環境の再生を行う関心を持たず、彼らが帰った後も汚染は続くのだから。

ムナナには五つのウラン鉱山があった。(1)ムナナの露天掘り鉱山、(2)その直ぐ南側に入り口があった地下鉱山、(3)さらにその南の約20億年前から存在していたオクロ天然原子炉があった場所を露天掘りした鉱山、(4)オクロの地下鉱山、そして(5)ムナナの露天掘り鉱山の数百メートル北のポインジ地下鉱山だ。

先に進む前にフランスの国益を代表する鉱山会社が鉱石を輸送するために国境をまたぐインフラストラクチャーを建設してオペレーションしていたことを言うておかねばならない。ムナナから20キロほど南のモアンダには、フランスの巨大な鉱山会社エラメットが支配するCOMILOGのマンガン鉱山がある。COMILOGはモアンダでマンガンを採掘するために1953年に設立された。採掘されたマンガン鉱石を輸送するために、モアンダと76キロ南のコンゴ共和国のムビンダを結ぶロープウェイが1959年に開通して、マンガン鉱石は熱帯雨林の上をムビンダまで輸送され、そこからコンゴ＝オセアン鉄道でポワント＝ノワール港まで運ばれ、そこから船でフランスに運ばれた。ムナナのウラン鉱石は、モアンダまで運ばれた後、ロープウェイでムビンダまで運ばれ、そこから鉄道でポワント＝ノワール港まで運ばれた。1986年にトランス＝ガボン鉄道が完成すると、ロープウェイは廃止され、マンガン鉱石はモアンダからオウエンド港に運ばれるようになった。

ウラン鉱石に関しては状況が少し異なっている。すでに述べたようにウラン鉱石はムナナからモアンダに運ばれた後、そこからロープウェイでコンゴ共和国のムビンダに運ばれ、そこから

コンゴ＝オセアン鉄道でポワント＝ノワール港まで運ばれ、そこからボルドーまで船で運ばれ、陸路グーニオンに運ばれた。グーニオンには CEA が 1955 年に創設したウランの精錬・濃縮工場があり、ムナナのウラン鉱石を原料としたイエロー・ケーキはこの工場で精製された。ムナナでは 1978 年にウランの精錬施設が造られたので、これ以降はウラン鉱石ではなく、イエロー・ケーキが輸送されるようになったらうから、輸送された総トン数は大幅に減ったことだろう。

考えねばならない問題が二つある。一つ目は中部アフリカにおいてフランスの一企業が、国境を跨いでマンガン鉱石とウラン鉱石を輸送するためのインフラストラクチャーを建設していたことだ。植民地そしてフランサフリクでは、このような鉱山会社が例外的な権力を持っている。大規模なインフラストラクチャーを建設する過程において、いくつもの村が破壊され、住民たちは移住させられ、そこに新しい町が造られ、新しい住民たちが移住してきたが、1986 年にトランス＝ガボン鉄道が完成すると、ロープウェイは廃止された。このインフラストラクチャーはそこに住む人間のためのものではなく、掘り出されたマンガン鉱石とウラン鉱石を港に運び、そこからフランスに運ぶためのものだった。

二つ目は二重基準の問題だ。ムナナに精錬施設が造られた後、グーニオンのウラン精錬・濃縮施設は必要がなくなり廃止され、施設は解体されて、ウランで汚染した機材や尾鉱は地下に埋められた。廃止措置が終了した後、その場所にはグーニオン FC のサッカースタジアムと駐車場が建設された。2008 年にスタジアム南側の駐車場が放射能で汚染されていたことが、ムナナの労働者たちの住宅の放射能汚染の調査を行なった CRIIRAD の調査によって判明した。証拠を突きつけられたアレヴァ（現オラノ）は後に汚染を認め、南の駐車場は立ち入り禁止となっている。オラノ／アレヴァ／コジェマは、NGO に放射能汚染を指摘されるまで、汚染の事実については何も言わない。この振る舞いはパターン認識が可能だ。ムナナではウラン鉱山で使われた機材が谷に捨てられ、ウラン鉱山とその尾鉱は土を被せられ、水没させられただけで、そのままになっている。ガボンとフランスでは廃止措置に関わる規制の有無とその強制力の程度が異なっている。ガボンにおけるこの安上りの廃止措置は、法に則ったものだと主張されている。放射線に関わる法が整備されていなかったことを知った上でやったことだ。

## 6. ウラン鉱山の埋め立の後の景観

私は 2019 年 9 月に 1 ヶ月ほどガボンを訪問した際、首都のリーブルヴィルから東に 700 キロほど離れたフランスヴィルに夜行列車で移動して、そこから 60 キロほど西に位置する次の宿泊地であるマンガン鉱山の町モアングの下見をした後、そこから 20 キロほど北のウラン鉱山があったムナナを訪れた。フランスヴィルからモアングに移動した後、私は再びムナナに行き、埋め立てられたり人工湖の底に沈められたりしたウラン鉱山跡と、鉱山労働者のためにウラン鉱

山の尾鉱を建築材料として建設された「<sup>シテ・レノヴァシオン</sup>刷新の町」などを見てからモアンダに戻った。下痢のために3日間モアンダで休んだ後、私は9月14日の夜から18日の午後までムナナで過ごした。時間的な余裕が限られているので、以下では二枚の写真を参照しながら、1961年から1999年までCOMUFがウランを採掘したムナナの景観がどのように変化したのか大まかに見ておこう。COMUFは1997年からウラン鉱山の埋め立てを開始して2004年に完了している。

写真1は、地質学の修士号を持ち、現在ムナナにおいて放射能で汚染した建物を壊して放射能で汚染されていない建材を使って建て直すプロジェクトで働くケヴィンにもらった近年のムナナの航空写真の上に、ウラン鉱山が存在していた場所を示す放射能マークを私が重ねたものだ。上から(1)ボインジ地下鉱山(1980-1991)、(2)ムナナ露天掘り鉱山(1958-1967と1972-1975)、(3)ムナナ地下鉱山(1965-1971)とウラン精錬工場、(4)オクロ地下鉱山(1977-1997)、(5)オクロ露天掘り鉱山(1968-1985)。ウラン鉱山跡には小さな看板が立っている。例えば、ムナナ露天掘り鉱山を尾鉱で埋め立てた場所には「建築禁止地区」、ウラン精錬工場があった辺りには「農作禁止」、オクロ天然原子炉／露天掘り鉱山跡に汚染した機材を捨てて水没させた人工湖には、背中にカゴを背負った女性がマニオックの水に浸す絵に斜線が引かれて「浸すこと禁止」とあり、その近くには「水浴禁止」の看板もある。周囲に柵はない。

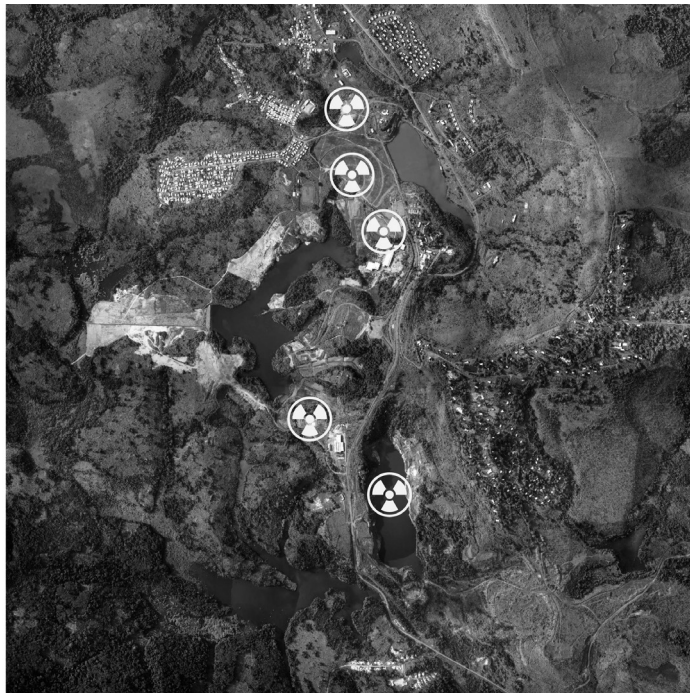


写真1. 放射能マークを書き加えたムナナの航空写真（撮影年不明）

次の写真は、エリク・ミシエルのドキュメンタリー映画「ムナナ、見えない傷」(Michel 2017) に挿入されている西側から接近する航空機から撮影されたすり鉢状の露天掘り鉱山だ。手前にはウラン鉱山で働く一番下の階層の鉱山労働者たちの近代的な住宅が並ぶ「刷新の町」が見える。これらの住宅は、ウラン鉱石から選鉱を取った後に残った尾鉱を建材として建設されたから、住んでいるだけで被曝する家が少なくとも 120 軒あったことが 2007 年に行われたフランスの NGO シェルパの調査の後に明らかになっている。露天掘りの鉱山のすぐ西側(写真ではすり鉢状のウラン鉱山の下の木がない土地)にはムナナ FC のサッカー場が造られた。どこかで見た風景だ。CEA が創設してコジェマが運営したウラン精錬・濃縮工場があったグーニョンだ。そこでは核廃棄物を地下に埋めた上にサッカースタジアムの駐車場が造られたのだった。ここでも同じ組織が同様のトリックを使って再建という名の埋め立てを行なった。だが両者の間には重要な違いがある。



写真 2. ムナナのウラン鉱山の露天掘り(撮影年不明)

写真 1 には以前は存在していなかった三つの人工湖が写っている。露天掘りのウラン鉱山を埋め立てた場所と地下鉱山への入り口があった場所の東側の人工湖は、堤防を造り小川を堰き止めて小さな湖になっている。ここは使用禁止ではないので、水浴をする人たちや、マニオックを水に晒す女たちが来る。その南西の人工湖はその西端に堤防が造られ水が堰き止められた。COMUF は 1961 年から 1975 年までの間に 2 百万トンを超える尾鉱をこの谷に捨てていた(WISE Uranium Project 2004)。コジェマは尾鉱を捨てていた場所の西側に堤防を築いて水没させて放射能汚染を経済的に抑えている。環境の放射能汚染については COMUF がモニタリングをしている

が、その結果は公表されていない。また「刷新の町」に住む人たちは線量計を持っておらず、自分たちが住む場所がどれほど放射能で汚染しているのか知る術を持っていない。この人工湖の水は西のミテンベ川に流れ込み、ミテンベ川はレケディ川と合流する。オクロの天然原子炉があった場所ではウランの露天掘りが行われ、その中に汚染した機材などが投棄されて人工湖となっている。オクロの水は南のレケディ川に流れ込んでいる。

## 7. 丘の上の別世界

COMUF のディレクターの屋敷は、露天掘りのウラン鉱山と地下鉱山への入り口とウラン精錬工場と鉱山労働者たちの居住地区「刷新の町」と技術者たちの居住地区「<sup>カルティエ・サンクミル</sup>五千地区」を見下ろす丘の上にあった。ディレクターは、家から労働者たちが働く場所を一望にすることができた。この距離は何を可能にしたのか。

今では廃墟となっているが、この丘の上には COMUF で働くフランス人たち管理職とその家族のための娯楽施設があった。そこには飛び込み台付きのプール、バー、レストラン、図書館、遊園地、テニスコート、バスケットボールコートなどがあった。丘の上の「<sup>シテ・カールドル</sup>管理職の町」には下界にはないものがあと三つあった。針葉樹林と飛行場と汚染されていない水源地だ。ここには針葉樹がたくさん植えられていたから、労働者たちが住む丘の下とは異なる雰囲気のある町があった。下界の人々は乗合バスで移動したが、丘の上の住人たちは自家用車に乗っただけではなく、丘の上の飛行場から飛び立つこともできた。そして丘の上の人の住まない北側には、木々に囲まれた自然のままの水源地があり、そこから水道が引かれていた。

ケヴィンが3年前から住んでいる50年以上も前に建てられた家には、昔フランス人の家族が住んでいたようで、ぼろぼろになったフランス語の本がたくさん残されていた。多くのものは「管理職のサークル」という名の図書室から借りてそのままになったものだが、中にはパリ郊外の図書館から借りてムナナまで持って来た子供向けのパストールの伝記もあった。彼／女らは、CEA やコジェマに雇われてガボンで働き、あるいは家族としてそこに住み、40年後の1999年にはフランスに帰国して、誰もいなくなった。コジェマは放射能で深く汚染したウラン鉱山跡を土で覆い、あるいは水没させただけの簡単な再生事業を行い、再生のための工事は2004年に完了した。残された住宅が放射能で汚染していたことが判明したのは2007年のことだ。汚染した人工湖の水は川に流れ込み、大雨が降ると汚染物質を覆っていた土が流出する。

増え続ける核廃棄物は遠いところに捨てればそれで良いのか。私がここでスケッチを試みたのは、核廃棄物をどうするのかという重要な問題を直視しない核開発から生まれた文明よりも長い放射能汚染の現実だ。私は経験的な諸事実のいくつかの断片を示したに過ぎないが、これらの断片は核戦略と核エネルギー開発の本質を映し出す。この国家間の競争的な営みは本質的に寄生



的であり、それは寄主を蝕んでゆく。自己調整的な市場は生命を育む長い過程を知らない。より多くの国家が核エネルギーへの依存を深め、世界の覇権を握ろうとして争って進むこの道は、寄主を病に至らせ、寄生者たちの環境世界を周縁の方から汚染する破壊の道だ。何らの苦しみにもあわずして、この世のきわに至るまでは、何びとをも幸福とは呼ぶなかれ。

## 参考文献

- Blowers, Andrew 2017. *The Legacy of Nuclear Power*. London: Routledge.
- Hecht, Gabrielle 2014. *Being Nuclear: Africans and the Global Uranium Trade*. Cambridge: The MIT Press.
- Kuletz, Valerie L. 1998. *The Tainted: Environmental and Social Ruin in the American West*. New York: Routledge.
- Michel, Eric 2017. Mounana, les blesseurs invisibles. Paris: Docs 66.
- WISE Uranium Project 2004. The inglorious legacy of COGEMA in Gabon - Decommissioning of the Mounana uranium mine and mill site. (<http://www.wise-uranium.org/udmoun.html> 2019年12月30日取得)
- 朝日新聞 1998. 「「原子の火」32年消ゆ」1998年4月1日.
- 朝日新聞 2001. 「東海原発廃炉12月着手」2001年10月5日.
- 朝日新聞 2013. 「東海原発廃炉先送り」2013年10月5日.
- 朝日新聞 2014. 「東海原発最もレベル低い廃棄物、敷地内埋設の方針」2014年9月26日.
- 朝日新聞 2015. 「廃炉作業の進み具合公開」2015年7月30日.
- 朝日新聞 2017. 「中間貯蔵施設が稼働」2017年10月29日.
- 朝日新聞 2018. 「汚染土保管工事加速も」2018年7月21日.
- 朝日新聞 2019. 「諫早「開門せず」確定」2019年6月28日.
- 朝日新聞 2019. 「小泉氏、福島原発視察」2019年10月3日.